

列王記上 17 章 8-16 節

ヘブライ人への手紙 9 章 24-28 節

マルコによる福音書 12 章 38-44 節

本日は、子どもとともに捧げる聖餐式です。実際の礼拝では、日曜学校「ぶどうの木」礼拝でのお話のようになるとと思いますが、この原稿では通常通りに学びたいと思います。本日も福音書を中心に学びます。『聖書』の小見出しに「律法学者を非難する」と「やもめの献金」とあります通り、二つのお話があります。この二つが連続しているのは、福音書物語の構成によるものでしょう。

先週は、一人の律法学者が、イエス様のもっとも重要な教えを明らかにするお話でした。物語の流れでは、聖書日課で省略されていますが、その後「ダビデの子についての問答」（マルコ 12：35-37）が続きます。そこでイエス様は「**どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか**」（マルコ 12：35）と問いかけます。そこはメシア観の違いを示しているのです。メシア観の違いとは、イエス様はメシアですが、従来のメシアとは異なるということです。これはマルコ福音書が示す主題の一つです。その古いメシア観を律法学者は支持していた、イエス様はそのことをここで指摘しているのです。

それを受けて本日の箇所になります。イエス様はここで「**律法学者に気をつけなさい**」（マルコ 12：38）と語り始め、律法学者を厳しく批判します。「気をつけなさい」という言葉は、「見る」という言葉ですが、日本語でも「よく見なさい」が注意を促すことと同じです。この後に続くイエス様の言葉は、マタイ福音書ほどではありませんが、厳しい批判です。そもそも物語の中で、律法学者は、ほぼ最初からイエス様の敵対者でした。先週の律法学者が、いかに例外であったかが分かります。

ただし、歴史的にすべての律法学者が、イエス様の批判するような人々であったかというところではありません。具体的例をあげれば、パウロも律法学者ですが、イエス様が批判しているような人ではなかったと思います。パウロは、極めて真面目で、律法を守ることに熱心でした。だからこそ、それまでの律法解釈にあわないイエス様を、メシアとして受け入れられなかったのです。しかし、そのパウロも『聖書』をしっかりと学んでいる律法学者であったからこそ、『聖書』全体がイエス様をメシアとする主なる神様の意図に気付き、大転換をしたのでした（使徒言行録によれば復活のイエス様に会ったからです）。

先週の一人の律法学者が例外であったように、パウロも例外とも言えますが、イエス様の最後の言葉、「**このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる**」（マルコ 12：40）を字義通りに受け止めて、かつ普遍的に解釈し、イエス様をメシアとして受け入れない律法学者は、そのままでいる限りは、絶対に許されない、救われないと考えることは、行き過ぎた理解です。パウロのように回心しなければ彼らに救いはないとは言えません。

ただし、「律法」も法律の一つですが、他の法律とは異なるということを忘れてはなりません。「律法」は、主なる神様の愛に人間が応える方法として、神様が下さった法律だからです。人間が自らの理性に基づいて自分たちのために作った法律とは異なるのです。つまり、根本から一般的な法律とは異なるのです。それゆえ、「律法」の解釈によって、貧しい人、弱い人を虐げることがあってはならないのです。ここ

でのイエス様の律法学者たちへの批判も、その点を中心であるといえます。そして、それゆえに、次に一人の「やもめの献金」のお話が続くのです。

後半部分の物語では、ひとりのやもめ（未亡人）が登場します。律法には、「**いかなる寡婦も孤児も苦しめてはならない**」（出エ 22：21）という文言もあります。しかし、実際にはその通りに実行されなかったことも多く記されています。本日の旧約日課もその一例です。サレプタの未亡人との子どもは、は、エリヤに出会わなければ、生きられなかったかもしれません。本日のお話の未亡人も、お話の全体から推測するに様々な苦難の中にあっただと思われまます。

さて、「**イエスは献金箱の向かいに座り、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた**」（マルコ 12：41）とあり通り、イエス様の時代のエルサレム神殿には、献金箱（以前の訳では賽銭箱）がありました。自由献金を入れる場所です。その中の大勢の一人として、未亡人の入れたお金は、「**レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランス**」とあります。現在の価値におおざっぱに置き換えれば100円ぐらいです。決して多くない額ですが、未亡人にとって、全財産でした。未亡人はすべてを捧げたのでした。イエス様がなぜそれが分かったかは、読者の想像に任されています。

イエス様は、この未亡人の行為から、弟子たちを呼び寄せて教えます。「**よく言うておく。この貧しいやもめは、献金箱に入れている人の中で、誰よりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである**」。この言葉は、単に逆説的なことを語ったということではありません。主なる神様が求めているのは、金額ではなく、主なる神様に対する思いであるということです。律法を守ることの主旨が、主なる神様の愛に応えることであると同じです。そして、先週学んだ通り、主なる神様に対する思いは、そのまま同じく、隣人に対する思いにつながります。そこが大切である。イエス様は、ここでもそう語っているのです。

もちろん、この未亡人には、隣人を大切に作る余裕などはありませんでした。しかし、だからといって、彼女の行為は、主なる神様も隣人も大切にしない、自分だけのために生きる行為でもありませんでした。日本円にして100円ぐらいしかない、それでも自分にできることは、主なる神様の愛に応えることを、すべてを用いて行ったのでした。

弟子たちを含めて、神殿に参拝に来ていた人たち、神殿で働いている数多くの祭司たち、それらの人々は、この時にこの未亡人の行為に気が付きませんでした。しかし、イエス様は気が付いたのでした。この後、この未亡人がどうなったのかは書かれていませんが、そこも読者の想像に任されているといえます。

ここから学ぶことは、ただ一つ、教会もそのようなイエス様の視点を持つことが大切だということです。もちろん、教会は政治的活動あるは社会構造を変えることを目的とした集団ではありません。しかし、人間の理性や判断では、見過ごされてしまう視点、それがなんであるかを示すのが、教会の役割といえるでしょう。そして、その基本となるのが、主なる神様の愛を感じられる礼拝と交わりにほかなりません。とはいっても、わたしたちの教会を含めて、礼拝のあり方ですら、これからも改善すべき余地があるような発展途上状態です。しかし、そのような目標を持つ集まりがあることが、どんなに世界が混乱しても、希望となります。世界の希望となれるような歩みを、わたしたちも続けたいと思います。